

シリーズ 第67回

安来製鋼所

奥津分工場

大正三年（一九一四）、第一次世界大戦が勃発します。この戦争はヨーロッパが主戦場となりますが、日本も日英同盟に基づいて参戦し、当時ドイツが租借していた中国の山東省の要塞や、太平洋にあったドイツが植民地としていた島々などを攻略します。



安来製鋼所奥津分工場



製鉄炉

この世界中を巻き込んだ戦争によって、国内は海運業や鉄鋼業を中心に好景気に沸き、多くの成金が誕生することにもなります。特に鉄鋼業については世界的な供給不足に陥り、国内でも数々の製鋼所が設立、または経営拡大を図っていきました。

そのような中で、島根県の安来製鋼所も大戦景気に乗じて事業拡大を図り、松江の第二工場に続き、奥津に分工場を設置することを決定しました。設置場所は、奥津温泉街から約五〇〇m北上し、水原橋を渡った西側一帯になります。

奥津一帯は古代からたたら製鉄が行われていた地域で、特に江戸時代から明治時代にかけてがその最盛期にあたり、鍛冶屋も多く存在し、山中にはその操業によって生じた鉄滓（かなくそ）が多く廃棄されていました。鉄滓は、鉄の原料となる砂鉄と炭を製鉄炉で熱した際に、砂鉄の中に含まれる不純物が溶けて固まったものですが、明治時代以前の製鉄技術では、砂鉄内の鉄分と不純物が

うまく分離せず、鉄分が含まれる鉄滓も多くありました。

安来製鋼所奥津分工場が設置されたのは、この鉄滓を再び溶かしてその中に残っている鉄を取り出そうということを目的としたものです。耐火レンガ造りの炉と煙突、モーターの「ふいご」（送風装置）をもち、事務所・社宅・倉庫を併設した当時としては最先端の設備を備えた工場は、大正七年（一九一八）に着工し、翌八年に操業を開始しました。

奥津分工場の製鉄炉は、耐火レンガで築いた直径約二m、高さ約五mの丸炉で、それに鉄帯をかけて固定していました。操業の際は炉の上から鉄滓と木炭を投入して、四基のモーターで炉内に空気を送り、温度を上げ鉄滓を溶かしますが、鉄滓には有害な不純物が多く含まれていたため、石灰も投入されていたようです。そして炉の下部から鉄と鉄滓を取り出しました。鉄は砂の鑄型に流し込み、鉄滓は吉井川に廃棄していました。原料の鉄滓や木炭は奥津だけでなく、上斎原からも馬車で運んでおり、石灰は津山から調達していたと、当時奥津分工場に従事していた人の証言が残っています。

しかし、この工場が操業する前年に第一次世界大戦が終了したことから、鉄の需要は大幅に減少、価格も下落してしまいます。それに伴い、



現在残る煙突

全国の鉄鋼会社も倒産や事業縮小を余儀なくされます。安来製鋼所もその例外ではなく、大正九年（一九二〇）には松江の第二工場を閉鎖、奥津分工場も当初から故障が相次いだことも一因となったのか、間もなく生産縮小することとなり、開始六年後の大正十四年（一九二五）には、ついに閉鎖してしまいます。奥津分工場の閉鎖は、古代から続いた奥津地域のたたら製鉄の終焉でもありました。

現在は、工場の施設は取り壊され、わずかにレンガの煙突のみが当時の名残を惜しむかのように佇んでいます。

※煙突は、近年レンガの間から木が生育し、崩落の危険もあります。また、私有地でもありますので、見学は離れた場所からしていただくようお願いします。

参考資料「奥津町史」通史編、「作州のみち」2（下）写真提供…石原義也

生涯学習課 日下

電話(0868)54-7733